

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ホワイトヘッドのコスモロジーにおける「行為」の 偏在性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): ホワイトヘッド, コスモロジー, 汎主体主義, 行為, 「によって」関係 キーワード (En): 作成者: 平田, 一郎 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006008

ホワイトヘッドのコスモロジーにおける「行為」の遍在性について

平 田 一 郎

要 旨

ホワイトヘッドのコスモロジーにおける究極的実在、世界がそれから構成されている生起としての現実的存在は、全てが経験の主体として「生きている」。この汎主体主義について、人間経験や動物の経験まではともかく、無機的な生起まで「生きている」ということは理解しがたい。他方この現実的存在は主体的志向という目的因によって生成する生起であると規定されている。そこで本稿では、人間経験において意図という目的因によって生じる行為との比較によって世界での現実的存在のあり方がどのようなものであるのかを解明しようとする。その場合現代の行為論における「アコーディオン効果」やゴールドマンの「レベル生成」といったことがポイントとなると共に、無機的な生起についてはホワイトヘッドの「物的目的」という考え方が重要な意味を持ってくる。

キーワード：ホワイトヘッド、コスモロジー、汎主体主義、行為、「によって」関係

1. はじめに

ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、現実的存在 (actual entities) は「究極的実在 (Final Realities)」(PR 22) と呼ばれている。そしてホワイトヘッドは言う。「現実的存在—現実的生起 (actual occasion) とも言われる—はそれから世界が構成される究極的な実在物である。現実的存在の背後により実在的な何ものも見出されない。神は現実的存在であり、はるか遠くの空虚な空間のもっとも些少な一吹き存在もまた現実的存在である」(PR 18)。「生起 (occasion) という語に示されているように、現実的存在は「物」ではなく「出来事」¹⁾ である。即ち「この石」という物が存在するのではなく、「この石がある」という出来事が生成する。世界とはそういった諸々の出来事の生成に他ならず、それゆえ世界は「過程」(process) であるとされる。ただしこの現実的存在には神も含まれるし、そういった神は過去から未来を通してのあらゆる生起に関わる非時空的存在とされる。それゆえ神のみは、現実的「存在」(entity) と言われても、現実的「生起」(occasion) とは言われない。

ホワイトヘッドのコスモロジーの特徴として、このように諸々の出来事、即ち生起の生成として世界をとらえるということの他に、そういった生起が全て何らかの意味で「生きている」

とする主張がある²⁾。これはそういった現実的存在を「経験」(experience)と主張することに端的に現れている。ホワイトヘッドは言う「これらの現実的存在は複合的で相互依存的な経験の滴り (drops of experience) と考えられる」(PR 18)。また「それぞれの現実的存在は所与 (data) から生じる経験の活動 (act of experience) と考えられる」(PR 40)とも言う。

このように全ての生起が「経験」であると主張することは、通常の意味での経験が心によるものである以上、全ての生起が何らかの意味で心的な要素を有する、という主張に至る。即ち「各々の現実態 (actuality) [= 現実的存在] は本質的に双極的 (bipolar)、即ち物的 (physical) かつ心的 (mental) である」(PR 108)。このように宇宙の全ての究極的実在が物的なだけでなく心的でもあるという限りで、ホワイトヘッドのコスモロジーは「汎心論」(panpsychism)と言われる。もっともそういった生起が経験を有する、むしろ経験の主体であるという点からいえば、L.S.Fordが主張するように³⁾「汎主体主義」(pansubjectivism)」と言うべきであろう。即ち現実的存在は「経験」の主体として、物的かつ心的な活動をなす。

こういったホワイトヘッドの汎主体主義は、現代における自然観において重要な意義がある。なぜなら自然物がわれわれ人間のために利用される資源というのではなく、共に「生きている」仲間であると考えられる可能性をもたらすからである。欧米文明は自然物を資源として自由に操作できると考えるがゆえに、他の生物の絶滅や自然環境の汚染といった環境問題をもたらした。その根底には、人間を神の似像として他の自然物よりも卓越した地位に置き、他の自然物は人間が「産めよ、増やせよ、地に満てよ」という神の命令を果たすために神が創造した被造物である（小麦や牛は人間が食べるために創造され、花は人間を慰めるために創造された等々）とするキリスト教の自然観がある。ホワイトヘッドのコスモロジーはこういったキリスト教—欧米文明の自然観を超える。そしてそれゆえそれは、環境問題の解決のための思想となる可能性がある。即ち共に生きているがゆえに、自然物を「仲間」と見なし、あるいはそれを傷つけることへの「畏れ」をもたらすといった考え方をもちます。

しかし反面このホワイトヘッドの汎主体主義は、理解しがたい。実際人間や動物までは何らかの経験を有する存在であることは確かであろうし、(ホワイトヘッド的な意味でなく) 通常の意味で生命を持つ存在までは「経験」と呼べないこともない何かを見出すことができるかもしれない。しかし石 (がある) とか水 (がある) といった無機的な生起が経験を有するというのはわれわれの常識に反する。

ここでわれわれが目指したいのは、先に現実的存在を「経験の活動」とすると述べた時の「活動」(act) という言葉である。無機的な生起の生成さえも、何らかの意味で「意図的行為」に類するものと見なせるとしたらどうであろうか。それぞれの「経験の活動」は何らかの意味での「意図」によって生成する、そういった諸々の「行為 (action)」としてある。そして世界が過程であるとは、そういった諸々の「行為」が相互に関係し、あるいは重なったものとして

ある、そのあり方を示しているとする。即ちホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、行為は人間行為だけでなく、生物の活動や無機的生起として遍在している、あるいはむしろそういった遍在する諸々の「行為」によって世界が構成されている、と解釈してはどうか。

そしてこのような「行為」同士の関係や積み重なりと言う点について、現代の行為論における諸議論との比較は、ホワイトヘッドのコスモロジーの具体的なイメージをつかむのに大きな利点がある。現代の行為論が人間の行為という「生きている活動」について論じたことを、ホワイトヘッドのコスモロジーにおける現実的存在においても拡張した形で見出すことができるなら、現実的存在が「生きている」ということがどのようなことであるかということの理解が深まるであろう。即ち現代行為論における諸々の議論を拡張して現実的存在に応用できるとするなら、現実的存在もまた人間の行為を何らかの形で「拡張」したものを見なし、生きている人間の行為とのアナロジーで、現実的存在の「生きている」あり方が明らかにされることになる。それゆえ本論文では、現代英米哲学における行為論の議論と比較しながら、ホワイトヘッドにおける究極的実在である現実的存在 = 「行為」のあり方について探求する。

2、現実的存在と行為

現実的存在を「行為」と見なそうとする時、重要なのはそれが目的因によって生成する、ということである。即ち「現実的存在の限定された統一性は目的によってまとめられているのであり、その目的因は与件の限定性や非限定性への漸進的な関連性によって決定された漸進的な理想へと向かっている」(PR 150)。実際「過程はある究極的な目的への成長と達成なのである」(PR 150)。この現実的存在の生成が諸抱握の合生である。そして抱握はそれが何かを抱握するという肯定的なものである時感受 (feeling) と呼ばれる⁴⁾。

この「理想」あるいは「究極的な目的」が「主體的志向」(subjective aim) である。即ち

「主體的志向」、それは主体の生成を統制するものであるが、自己創造のその生成の過程において、それを実現しようとする主體的形式 (subjective form) を有するある命題を感受するその当の主体である (PR 25)

「現実的存在はそれ自身の生成において、また『何』であることになるのかということについての問題を解決する」(PR 150)。それゆえこの命題の「内容」(content) は、それがそうなることになるもの、即ちこの現実的存在のあり方である。また「命題の主要な機能は、感受への誘因として関連すべきである」(PR 25) 一方、主體的形式とはいかに感受を感受するかということである。それゆえ主體的志向とはこの現実的存在のあり方への誘因を感受する主体、

ということになる。この主体はまた現実的存在それ自身と見なせる。なぜならこの主体とは実現すべき目的だからである。

こういった目的因によって生成する限り、主体的志向は意図に比しうるし、現実的存在は意図的行為に類するものと見なせる。実際意図的行為においては、意図の内容を実現しようとして意図的行為が生じる。例えば、「手を上げる」という内容の意図を実現して「手を上げる」という行為が生じる。同じように、主体的志向の内容を実現することが現実的存在の生成となっているのであるから、主体的志向を意図、現実的存在は意図的行為と類するものとするのは自然なことである。

もっともホワイトヘッド自身は行為についてほとんど論じていない。これはホワイトヘッド自身の同時代の哲学（1910年代半ばから1920年代半ばに関して）において、行為が論じられることはほとんどなく、英国経験論の伝統により知覚こそが主として問題になっていたからである。実際ホワイトヘッドが人間経験に関して現実的存在を論じる場合、主として知覚を論じる。しかし先の「経験の活動 (act of experience)」という表現は、彼の理論がそういった時代的制約を超える可能性を示しているともいえる。

ともあれ現代の行為論における意図的行為の議論と比較しよう。意図的行為の因果的観念として、例えば R.Stout は次のように規定する⁵⁾。

ある行為主体が意図的に E を達成するのはただ次の時のみである。即ち行為者の意図した目標が達成されるであろうために達成されるべきであることを生み出す可能性が現実化する過程から、E の達成が結果する時その時だけである。

この規定において E は達成されるべき目標であり、ホワイトヘッドの主体的志向における命題にあたる。例えば「S が手を上げる」という意図的行為では、E は「手を上げること」である。

しかし現実的存在においては、たとえ「主体」と称されても、実は通常言われるような行為主体 (agent) は存在しない。ホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、命題の内容は「S が手を上げること」であり、この「行為」の主体は「S が手を上げること」それ自身、即ち現実的存在それ自身なのである。ここにホワイトヘッドの「行為」と通常の行為との大きな違いがある。そして主体的志向の内容の実現が現実的存在の生成であり、生成した現実的存在が主体である以上、主体的志向もまたそれが実現される限りにおいて主体と言えらる。実際先の引用 (PR 25) において、主体的志向を「当の主体 (that subject)」としていた。

他方ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて行為主体性は現実的存在を生成する過程内部にあるのではなく、自己超越体 (superject)⁶⁾ としての未来の現実的存在へと向かうものとしてある。それゆえ「現実的存在は経験する主体であると同時に経験の自己超越体である。それは

自己超越的主体 (subject-superject) なのである」(PR 29)。そして自己超越体は現在の行為が未来の世界のあり方を動かすという意味で、行為主体性 (agency) に関わるがゆえに、道徳的責任等にも関わる。それゆえホワイトヘッドは言う。

主体的志向の究極的な変容をなしている直接的な自己超越の主体の最終の決断は、我々の次のような経験の基礎である。即ち責任、是認ないし不同意、自己是認ないし自責、自由、強調といったものである (PR 47)。

ここでの「主体的志向の究極的な変容」とは、主体的志向の実現の最終段階、即ち当の現実的存在の生成の終着点であり、それゆえそれは完結した現在として未来へと超え出ていく。それは未来の世界を動かすということであり、だからこそ、未来に対する責任や自由といった経験が生じるのである。

3. 個別化の原理と神

このようにホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、主体的志向は主体であり、当の現実的存在それ自身である。そして主体的志向は過程全体に働いており、目的としてこの現実的存在のあり方でもある。それゆえクリスチャンが主張するように⁷⁾、主体的志向を現実的存在の個別化の原理と見なせる。即ち現実的存在が他と区別されてまさにその現実的存在とされるのは主体的志向による。例えば「手を上げる」という行為は「手を上げる」という意図の内容によって他と区別されたまさにその行為として同定される。それと同じことが主体的志向によって現実的存在に対してなされる。

これに対してノーボは主体的志向が現実的存在の過程の最初期の段階では働いていないと主張する。それゆえ主体的志向は過程全体に渡っていないために個別化の原理とは見なせないとするのである⁸⁾。この主張は、ホワイトヘッドのコスモロジーに対するノーボ独自の解釈による。しかし、主体的志向の最初の相であり神に由来する原初の志向 (initial aim) が現実的存在の生成の過程の最初からあるのは、ホワイトヘッドのテキストから明らかである。それゆえ主体的志向は、現実的存在の生成の過程全体に渡っているし、ノーボの批判は妥当ではない⁹⁾。

しかしここで原初の志向が神に由来するということが、即ちホワイトヘッドのコスモロジーにおける「行為」の「意図」が神から生じてきているというのは問題である。もしそうなら、ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、全ては神の操り人形であるということになるのではないのか。

ここで神を問題にせざるを得ないというのは、行為論における目的因を巡るより一般的な問

題状況から生じてきている。行為論において目的因は心的出来事と身体的出来事との間の因果的な関係に還元されることが多い。なぜなら因果系列の中に目的因を見出すことが困難だからである。例えばデイヴィッドソンは、事前意図 (prior intention) として全面的判断 (all-out judgement) を議論する¹⁰⁾。即ち意図とは目的因ではなく、その行為より前の (通常の意味での) 心的な出来事であり、それが原因となってその意図的行為を引き起こすとするのである。その限りでデイヴィッドソンの「意図」は目的因でなく、通常的作用因である。

しかしホワイトヘッドにとって「目的因と原子論は相互に結び付けられた原理である」(PR 19)。あるいはまた「作用因は現実的存在から現実的存在への移行を表現する。そして目的因はそれによって現実的存在が自らへと成る内的過程を表現する」(PR 150)。この点でホワイトヘッドのコスモロジーは行為論における目的因に関する反還元論 (antireductionism) に比することができるかもしれない。この反還元論をオブライエンは次のように定式化する。

p のために、あるいは p という目標で、あるいは p という目的で A を為す行為主体について語るかもしれない。そのような目的論的な主張は、明示的に行為主体の心理学的な状態とそういった状態が引き起こすものへ還元しない。そうではなく、そのように見えるのだが、それは目標 (goal)、あるいは結末 (end)、あるいは目的へと自ら直接振る舞うことへと焦点を合わせている¹¹⁾

ここで還元論と反還元論のどちらが正当であるのかという議論はしない。むしろ現代の行為論においてさえ、独立した目的因の可能性が認識されているということに注目したい。それゆえ「目的因によって生じる活動」とされるホワイトヘッドの現実的存在を、現代の行為論における行為とアナロジカルに考えることはそれなりに妥当である。

さらにデイヴィッドソン流の目的因の還元については、ホワイトヘッドの立場からは次のように議論される。ホワイトヘッドにとって現実的存在は経験の活動である。それゆえ全ての生起が経験を有する。しかし「意識が経験を前提としているのであって、経験が意識を前提としているのではない」(PR 53)。それゆえ全ての生起がデイヴィッドソンの言う (通常の意味での) 「心的な出来事」を有するというのではない。主体的志向は全ての生起を引き起こす目的因であるが、一部の生起 (人間の行為等) はともかく、全ての生起について目的因を心的な出来事への還元することは不可能である。その限りでホワイトヘッドはデイヴィッドソンと異なり、目的因である主体的志向を「事前意図」のような心的な出来事に還元することはない。

しかしそれだけではない。ホワイトヘッドの「意図的行為」に行為主体はなく、意図的行為において生成する生起それ自身が主体である。その限り「目的へと自ら直接振る舞う」というオブライエンの規定にもあてはまらない。なぜなら目的へと自ら振る舞う行為主体はそもそも

ホワイトヘッドのコスモロジーには存在しないからである。

このようにホワイトヘッドは目的因を現実的存在と区別された要因と認めている。しかしそれでは、それはどこから生じるのか。ここで「存在論的原理」が重要になる。「存在論的原理とは次のように要約される。現実的存在なしには根拠 (reason) がない」(PR 19)。先に述べたように過去の現実的存在における諸要因は作用因として働く。そこに目的因の入る余地はない。そして当の現実的存在は生成しつつあるのであり、その過程の最初に目的因はない。さらに未だ存在しないのであるから、未来の現実的存在においても当の過程を生成する目的因は存在しない。しかし過去でも現在でも未来でもない、非時間的な唯一の現実的存在がある。それが神である。それゆえ目的因、即ち主体的志向は存在論的原理により神から導かれねばならない。これが主体的志向の最初の相である原初的志向である。

この議論は新しい「永遠的客体 (eternal object)」の導入に似ている。永遠的客体とは、例えば色などの現実的存在が担う普遍的な性質である。実際「赤い色」という永遠的客体は、普遍的な性質として、ポストにも服にも花にも担われる。ここで過去の現実的存在に実現されていない全く新しい「性質」、永遠的客体を考えてみよう。それらは過去のどんな現実的存在にも担われたことがないため「新しい」。しかし存在論的原理によれば、これらの新しい永遠的客体を抱握する現実的存在が存在しなければならない。それゆえ過去に決して存在しなかった現実的存在としての神が要請される。この新しい永遠的客体を抱握する神の機能が「神の原初的本性 (primordial nature of God)」なのである¹²⁾。そして主体的志向に関しても、先に述べたように「この最初の相[原初的志向]は神の原初的本性からの直接的派生物である」(PR 67)。

原初的志向の他に、神と主体的志向との関係には別の要因もある。「神は新しさの器官 (the organ of novelty) であり、内的充実 (intensification) を志向している」(PR 67)。この「新しさ」は新たな永遠的客体と原初的志向による新たな現実的存在の生成に関連している。一方「内的充実」に関してホワイトヘッドは言う。

(viii) 主体的内的充実度 (Subjective Intensity) の範疇。主体的志向は、それによって観念的感受が始まるのであるが、感受の内的充実を (a) その直接的主体において、そして (β) 関連する未来において目指す (PR 27)。

主体的志向は諸感受を主体へと統合するだけでなく、内的充実を目指す。即ち現実的存在は経験するだけでなく、内的に充実して豊かに経験するのである。この内的充実あるいは豊かさもまた、神から派生する。

もっとも神は現実的存在に因果的な影響は与えない。なぜなら神からの原初的志向の派生において、現実的存在は神を因果的感受によって抱握するのではないからである。それゆえ神は

世界の諸出来事の作用因とはならない。ただし神は目的因によって現実的存在の内的充実に影響する。この影響は神の自己超越的本性によって生じるのかもしれない¹³⁾。しかしホワイトヘッドの神は万能ではないし、現実的存在は自己創造ゆえに積極的自由を有する。というのも神からの原初的志向は現実的存在を最終的には決定しない。「志向の原初的段階は神の本性に根付いている、そしてその完成は自己超越の主体の自己原因性 (self-causation) に依存している」(PR 244)。この「自己超越の主体」は内的充実を目指して (α) その直接的主体と (β) 関連する未来に関係する。しかし

この二重の志向—直接的現在と関連する未来—は、表面に現れているほど区別はされない。というのは、関連する未来の決定と、感受の内的充実度の度合いを与えることに関する予料的感受 (anticipatory feeling) は、直接の複合的感受に影響を与える要素なのである (PR 27)。

ともあれ自己超越の主体のこの自己原因性により、現実的存在は神の操り人形ではなく、自己決定的で積極的に自由である。即ち原初的志向が神から派生したとしても、「主体的志向の究極的な変容」は自己決定による自由なものであり、だからこそ先に述べたように、このようなこの究極的な変容は、「責任、是認ないし不同意、自己是認ないし自責、自由、強調」(PR 47) といった経験をもたらす。

4. レベル生成 (Level Generation) と感受

それではこのようなホワイトヘッドの諸「行為」は世界の中で相互にどのように関わっているのでしょうか。それについての手掛かりを得るために、現代の行為論における行為の個別化に関する議論を見てみる。

次の四つの行為を考えてみよう。

- 1) ジョンは指を動かす
- 2) ジョンは引き金を引く
- 3) ジョンはジェームスを撃つ
- 4) ジョンはジェームスを殺す

これらの行為は「によって関係 (by relation)」で結ばれている。即ち、1) によって2) が、2) によって3) が、3) によって4) が生じる。この「によって関係」は推移的で非対称的

である。即ち「1) によって2)」かつ「2) によって3)」から「1) によって3)」が生じる。また1) によって2) が生じる時、2) によって1) は生じない。

アンスコムによれば、これらの行為は一つの同じ行為である¹⁴⁾。それらの違いは記述によってある。この同一説によれば、この事例においては一つの行為が1) から4) の四つの記述を有することになる。デイヴィッドソンもまた同一説をとる¹⁵⁾。

他方ゴールドマンは「によって関係」の非対称的な性格によって四つの行為が存在すると主張する¹⁶⁾。即ちジェームズは4つの行為を為している¹⁷⁾。そして彼はこのような「によって関係」を「レベル生成」と名付ける。

ホワイトヘッドにおける「行為」=現実的存在のあり方についてはどうであろうか。これについては、次の一節が重要である。

ある現実的存在—A と呼ぼう—が他の諸々の現実的存在—B、C、D と呼ぼう—を感受する。このとき、B、C、D はすべて A の現実世界 (actual world) の内にある。しかし C と D は、B の現実世界の内にあるかもしれないし、その時には B によって感受されている。また D は C の現実世界の内にあるかもしれないし、C によって感受されうるかもしれない。……さて A の感受にとっての B は、また A が B の媒体を通して甘受すべく A にとって C と D を提示する。また A の最初の所与としての C は、A が C の媒体を通して甘受すべく A にとって D を提示する (PR 226)。

ここで A が B を感受するとは、A という現実的存在が B という過去の現実的存在を感受の客体として、その客体を原因として A という主体が生成するということである。なぜなら「作用因は現実的存在から現実的存在への移行を表現する」(PR 150) からである。ただし実際には A は B だけを感受して生成するのではない。複数の過去の現実的存在を原因として生成すると考えた方がよい。それゆえそういった A が生成するための原因としての過去の現実的存在の総体、A が有する諸感受の諸客体全てからなる総体を「現実世界」と称する。

するとこの文章において、A を 4)、B を 3)、C を 2)、D) を 1) とするべきであろう。即ち 1)、2)、3)、4) はそれぞれ別の現実的存在、「行為」なのである。従って現実的存在においては、「によって関係」は一つの行為の記述間関係ではなく、「行為」=現実的存在同士の関係であるとするべきである。即ちホワイトヘッドの現実的存在は、同一説ではなく、レベル生成と比することができる。

実際 1) は主体であり D の主体的志向あり、D を個別化する等々となる。例えば「ジョンはジェームズを殺す」(A) という現実的存在は、「ジョンは指を動かす」(B)、「ジョンは引き金を引く」(C)、「ジョンはジェームズを撃つ」(D) のどれでも原因としうる (= A の現実世

界にある) し、「ジョンはジェームズを撃つ」(B) は「ジョンは指を動かす」(C) ことによっても、「ジョンは引き金を引く」(D) ことによっても引き起こされる (= B の現実世界にある)。そして「ジョンは引き金を引く」(D) は「ジョンは指を動かす」(C)、を感受する、即ちそれを原因として生成する。そして先に述べたように、過去の現実的存在が原因となって現在の現実的存在が生成するのであるから、現実的存在の間での「レベル生成」即ち感受は因果的關係である。一方過去の原因の総体が現実世界であるから、過去の生起が現在の生起を引き起こすということは、その過去の生起が現在の生起の現実世界の内にあるということなのである。さらにホワイトヘッドは言う。

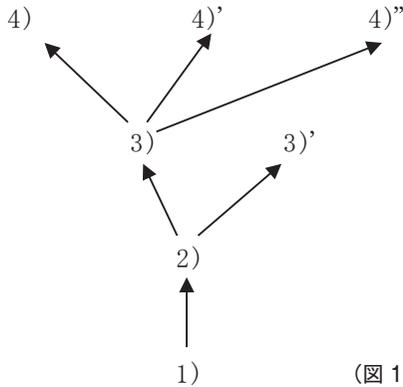
このように、わざと単純化した例においては、A は次のような三つの別個の源泉によって感受へと提示される D を有する。即ち (i) 直接になまの所与として、(ii) B という媒体によって、(iii) C という媒体によって。この三重の呈示が B と C という媒体に関する限り、A がそれを感受するための最初の与件という機能をはたしているところの D である (PR 226)

即ち推移的關係によって上の三つの關係は次のようになる。(i) D=1) による A=4)、即ち「ジョンは指を動かす」が「ジョンはジェームズを殺す」を引き起こす。(ii) D=1) による B=3) による A=4)、即ち「ジョンは指を動かす」は「ジョンはジェームズを撃つ」を引き起こし、それがさらに「ジョンはジェームズを殺す」を引き起こす。(iii) D=1) による C=2) による A=4)、即ち「ジョンは指を動かす」が「ジョンは引き金を引く」を引き起こし、それが「ジョンはジェームズを殺す」を引き起こすということになる。

このように考えれば、「行為」としての現実的存在が相互にどのように関わっているのかということについての、具体的で明確なイメージを持ちうる。全ての現実的存在は因果的に生成し、あるいは生成されるという關係を通して、何らかの「行為」として相互に関わりつつ、その総体が世界、即ち過程としての世界としてある。ただしホワイトヘッドの「行為」は人間の行為に限定されない。例えば無機的な生起として、e1)「水が蒸発する」→e2)「雲ができる」→e3)「雨が降る」→e4)「歩道が濡れる」といった因果系列もまた現実的存在における「レベル生成」と見なせる。こういった通常言われる意味で生命の無い無機的生起としての現実的存在については、後の5.でより詳しく論じる。

さてゴールドマンの挙げたこの例、あるいはそれに比する現実的存在同士の關係においては、關係は一直線状である。即ち1) → 2) → 3) → 4) となっている。しかしゴールドマンは一つの行為が複数の行為へと分化することを考察する。それが「行為樹 (action tree)」である。例えば、3) から3)' ジョンは轟音を立てる、がレベル生成され、4) から4)' ジョンは

ジェームズの母を悲しませる、や4)” ジョンはジェームズの息子をみなし子にする、がレベル生成されるとするなら、以下のような行為樹が形成されることになる（図1）。



（図1）

そしてホワイトヘッドのコスモロジーにおいても、先の「わざと単純化した例」という記述から明らかなように、「行為樹」が想定されうる。先の無機的な生起の例で言えば、e2)「雲ができる」の結果としてe2')「気温が下がる」を、e3)「雨が降る」の結果として、e4')「川が増水する」、e4'')「カエルが鳴く」といった生起を考えれば、図1と同じ形の「行為樹」が生じる。

またレベル生成はゴールドマンによれば4つのカテゴリーに区分される。1. 因果的生成 (causal generation)、2. 規約的生成 (conventional generation)、3. 端的生成 (simple generation)、4. 付加生成 (augmentation generation) である¹⁸⁾。これらをホワイトヘッドのコスモロジーでどのように定式化しうるか考えてみよう。

1. 因果的生成とは、これまでの例において考えられていた、直観的には因果関係と思えるものである。それについては、ホワイトヘッドのコスモロジーでは、感受の中でも因果関係にあたる単純物的感受 (simple physical feeling) に対応している¹⁹⁾。

2. 規約的生成においては、社会の規則がその関係に介入する。例えば「ジョンがジェームズを殺した」、から「ジョンは警察に殺人事件の捜査をさせた」といった行為が生じるような場合である。ここでは殺人に対する警察の捜査といった社会の規則に基づく制度が関わっている。ホワイトヘッドのコスモロジーでは、これらの規則はそれに関わる現実世界における永遠的客体によって表現される。それらの規則は永遠的客体であるからこそ、当の主体だけでなく、他の諸々の主体に共通する「普遍的なもの」としてある。そしてそれら規則が制度等で現実に関わることは、それら永遠的客体についての命題による現実的存在への介入として表現される。それら主体とは、例えば捜査する警官の行為であったり、捜査されるジョンであったりする。その警官の行為やジョンの行為に、問題の規則を対象とする命題的感受が統合されて、そ

れら行為が生成するのである。

3. 端的生成についてゴールドマンは次のように言う。「端的生成においては、ある状況の实在が、Aの遂行と結びつけられて、行為主体がA'を遂行するということを確実にする」²⁰⁾。例えばジョージが1m飛び上がり、ジェームズが1m20cm飛び上がった時、「ジェームズが1m20cm飛び上がる」という行為は、「ジェームズがジョージより高く飛ぶ」という行為を端的に生成する。ホワイトヘッドの図式では、A'はAの直接の未来の生起であり、ここで問題となる状況はA'の現実世界であるということになる。即ち「ジェームズが1m20cm飛び上がる」という行為が「ジェームズはジョージより高く飛ぶ」という行為を引き起こすと考えるのである。ここで両者は同時であって、時間的な前後関係は無い、それなのに後者を前者の直接的な未来とするのはおかしいではないのか、という疑問が生じるかもしれない。しかしホワイトヘッドにおいては、因果的な前後関係と時間的な前後関係は別に考えることができる。これについてはこの節の最後で「発生的区分」(genetic division)と「同位的区分」(coordinate division)の違いに関連して論じることにする。

4. 付加生成については、生成された行為Aは生成する行為に状況に関連する要素を付加することによってA'が生成される。そして生成された行為A'は生成した行為Aを含蓄する。例えば(窓から手を出している状況で)「手を伸ばす」という行為は「窓から手を伸ばす」という行為を付加生成する。この場合「窓から手を伸ばす」ということから「手を伸ばす」ということが論理的に導き出される。しかしこれについてホワイトヘッドの図式ではAとA'との間の違いは論理的レベルでの表現の違いに過ぎないということになる。ホワイトヘッドの立場からは生起としてAはA'と同一であるとされる。それゆえホワイトヘッドの図式では付加生成は問題にならない。

しかしレベル生成と感受には重要な違いがある。ゴールドマンによれば「因果的生成と因果性を区別することが非常に重要である」²¹⁾。もしそうであるなら、因果的生成と因果的な感受と何が違い、何が共通するのか、そこでレベル生成に比することで、ホワイトヘッドの感受についてどのようなことが明らかになるのか、といったことを論じなければならない。

ゴールドマンの主張では、因果的關係は行為Aと出来事Eとの間に成り立っているが、因果的生成は行為Aと行為A'の間に成り立つ。例えば3e) 弾が発射される、という出来事を考えてみよう。2)は3e)を引き起こすが因果的に生成はしない。そして3e)は4e) ジェームズはジョンに殺される、という出来事を引き起こすが4)を引き起こさないし、因果的に生成しない。出来事として4)と4e)は同じであるが、行為としてそれらは異なっている。

このような因果関係と因果的生成との違いについてゴールドマンの観点からは、二つの点に注意せねばならない。第一に、因果的生成の諸行為に同じ行為主体が共通のものとしてある。それゆえ行為は(行為でない)出来事を引き起こすが、出来事を因果的に生成しない。第二に、

時空関係が重要である。因果関係において結果は原因に引き続いている。他方因果的生成においては、「結果」としての行為は「原因」としての行為を包含している。例えば3) ジョンはジェームズを撃つ、はその内部に2) ジョンは引き金を引く、を明らかに含んでいる。さらにこれら諸行為の間には、空間関係においても包含関係がある。例えば2) は1) プラス引き金等々、である。

ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、これらの点はどのように取り扱われるのであろうか。第一にあらゆる現実的存在は主体として取り扱われそれゆえ行為主体は存在しない。例えば1) の主体は1) それ自身なのである。それゆえ現実的存在のあらゆる主体はお互いに違っている。共通の主体による異なった行為という考え方は存在しない。

時空関係については、発生的区分と同位的区分の間の違いが重要である。発生的区分とは次のようなものである。『『発生的 (genetic)』諸様態においては、諸抱握は、それらの相互の発生的関係のうちに示される。現実的存在は過程と見なされる。即ちそこには相から相への成長が存在する。そこには統合の、そして再統合の過程が存在する』(PR 283)。即ち発生的区分とは現実的存在が過去の現実的存在や永遠的客体去感受して、それらの感受を統合しながらその現実的存在が生成するその過程を示す。

他方同位的区分に関しては次のように論じられる。現実的存在が生成したその終点は「充足 (satisfaction)」と称される。この充足において現実的存在は生成しきったのであるから、充足において現実的存在は時空的に延長しきっているとよい。そのような充足における現実的存在同士の諸関係を扱うのが同位的区分であり、そこでの現実的存在が時空的に延長しきったものであるがゆえに、同位的区分は『『延長的諸量 (extensive quanta)』を産み出す』(PR 284)。実際「物理的時間はその『充足』の『同位的』分析 (analysis) [= 区分 division] において現れる」(PR 283)。即ち同位的区分とは延長的関係から見た現実的存在であり、現実的存在同士の時間的、空間的關係を示すものである。

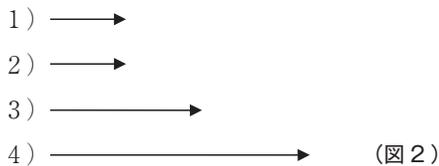
そしてホワイトヘッド的な意味での「レベル生成」あるいは感受は、発生的区分において探求されるのであって、同位的区分においてはではない。因果関係と時空関係は別のレベルで考察されるのであるから、因果的な前後、即ち原因—結果が、時間的な前後と一致する必要はない。因果的生成における行為間の関係のように、結果が原因を含んでいても全く問題が無い。むしろ、原因となる過去の現実的存在が結果となる現実的存在の現実世界の内にある、ということから、ゴールドマンの因果的生成におけるような包含関係にあることが現実的存在同士の因果関係であることを示している。あるいは先に端的生成に関して述べられたように、時空的広がりにおいて全く同一であっても、別の現実的存在として因果的な先後関係があることすらありうる。先の例を使えば、「ジェームズが1m20cm 飛び上がる」と「ジェームズがジョージより高く飛ぶ」は、同位的区分においては全く同じ時空的延長を有するが、異なった現実的存在で

ある。そして発生的区分において前者は後者よりも因果的に過去にあり、前者が後者を引き起こすと見なせる。

もっとも標準的なホワイトヘッドのコスモロジーの解釈では、現実的存在は他の現実的存在に隣接して包含関係が無い²²⁾とされる。もしそうであるならゴールドマンの意味で、現実的存在の間に因果関係はあっても、「レベル生成」はないことになる。しかしホワイトヘッド自身現実的存在の時空的広がりである「領域」(region)においては包含や重なり合いを論じている²³⁾。そういった状況で、現実的存在の包含や重なり合いを認めないというクリスチャンなどの標準的な解釈こそが不自然なのである²⁴⁾。そしてそうであるなら、ホワイトヘッドにおける現実的存在の間の因果関係を、ゴールドマンの因果的生成、そして他のカテゴリーも含めてより一般的にレベル生成と比することに何の問題もなくなる。

5. ホワイトヘッドのコスモロジーの可能性

それではこのように現実的存在同士の関係を、ゴールドマンのレベル生成に準じるものと考えることによどのような意義があるのであろうか。ここでゴールドマンのレベル生成における時空的延長の問題について考えてみよう。探求を単純化するために、図式を時間的延長にのみ限定する。すると1) から4) の図式は次のようになる (図2)。



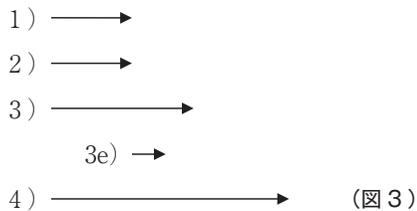
時間的延長において1) と2) は同一である。もっとも空間的延長は異なっているが、そして1) = 2) と3) の間の間隔は、ジョンが指を止めてから弾丸が当たるまでのものである。そして3) と4) の間の間隔は、弾が当たってからジェームズが死ぬまでになる。特に4) は引き伸ばされるかもしれない。というのも撃たれることと死ぬこととの間には長い間隔があるかもしれないからである。引き伸ばされた行為の例について、ゴールドマン自身は、「Sが本を書く」という例を挙げている²⁵⁾。あるいはむしろ1) から4) まで行為が引き伸ばされる、あるいは4) から1) まで行為が縮められるとすることもできる。これはアコーディオンのように伸ばしたり縮めたりされることから、「アコーディオン効果」と言われる²⁶⁾。

他方ホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、人間経験が現実的存在とされる以上、ゴールドマンが問題にするような行為同士の関係に関して、現実的存在同士の関係としてレベル生

成に類する形での因果関係を見出しうる。ただし先に述べたように、それらに共通の行為主体は無く、それぞれが異なった主体と見なされる。しかし現実的存在は人間の行為に限られず、むしろより一般的な世界がそれから作られる究極的実在である以上、人間行為と最も遠い無機的生起についても考えねばならない。

無機的生起、即ち無機的な現実的存在においては、人間行為としての現実的存在と同じく「行為」主体は存在しない。むしろ主体とは主体的志向それ自身であり、そのような主体的志向はホワイトヘッドの用語法では「物的目的」(physical purpose)と名付けられる。例えば「雨が降る」という現実的存在の主体的志向、即ち物的目的は、「雨が降る」という内容の命題の感受であり、この内容の命題を実現しようとする。言いかえれば、「雨が降る」という現実的存在は、「雨が降る」ということを目的として生成するのである。そして物的目的においては現実世界の因果的要素がほとんど主体的志向の命題の内容を決定する。即ち物的目的においては目的因独自の働きはほとんどないのであり、それゆえ物的目的による現実的存在、無機的生起は通常は目的因を持たず作用因によってのみ生成すると見なされるのである。むしろ物的目的の重要性は、自己超越体としての未来の現実的存在への影響に係っている。それゆえ物的目的の種類、即ち第一種と第二種分類も未来への影響の仕方の違いによる。即ち第一種とはその現実的存在が通常の形でそのまま因果的影響を未来の現実的存在に及ぼすものである。他方第二種とはそのパターン(ホワイトヘッドの言い方では永遠的客体)が反転した形で因果的影響を及ぼす。後者は例えば振動などがその実例として考えられる²⁷⁾。例えば空気を圧縮するパターンを有する生起が因果的に空気を膨張するパターンを有する出来事を引き起こす時、空気の振動としての音が生じる。このパターンには光の波長などもありえる。

さてこのような無機的出来事として3e) 弾が発射される、を考えてみよう。先に見たように、ゴールドマンにおいては3e) はレベル生成とは無関係であった。しかしホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、これも現実的存在であるから、人間行為としての1) から4) までの現実的存在との「レベル生成」、即ち感受の関係の中に入りうる。そこでこれをそれらの間に置けば、次のような図式になる(図3)。



3) の終端と 3e) の終端との間隔は、「弾がジェームズに当たる」ということと、「弾が銃

から出る」ということとの間隔である。そしてホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、3e)の因果性は時間的延長における先後関係とは無関係である。例えば、時間的延長の一部はより後にあるにもかかわらず3)は3e)を引き起こす。さらに3e)は4)より時間的に後に生じたにもかかわらず4)を引き起こす。発生的区分と同位的区分の区別故に、こういったことが可能となる。

それでは行為はどこまで時間的に引き伸ばされるのだろうか？例えば、4)' ジョンはジェームズの母を悲しませる、を考えれば、4)'は4)を超えて延長している。これは先に述べた「アコーディオン効果」の問題である。ゴールドマンの例を使えば、「ウィリアムは数十日の間本を書く」ということは可能である。そして引き伸ばしの問題は時間的延長性だけでなく空間的延長性にも関わる。しかし行為においては、行為主体の行為が行為主体の人生を超えることは稀である（もっとも孔明は仲達を死後走らせたが）。他方ホワイトヘッドのコスモロジーでは、そんな限界は無い。例えば「ローマは衰亡する」は「ローマは衰亡する」という主体的志向によって現実的存在となしうる²⁸⁾。

縮小については、通常の意味での行為においては限界がある。即ち基礎行為（basic action）である²⁹⁾。他方ホワイトヘッドのコスモロジーにおける現実的存在の縮小に関しては、サブアトミックなスケールへと縮小するのに何の障害もない。それどころか、サブアトミックなスケールのみを現実的存在としてしまうという解釈があるし、むしろそれがホワイトヘッドのコスモロジーについての標準的な解釈となっている。

このサブアトミックな生起のみを現実的存在とする解釈は、先に述べた現実的存在同士に重なり合いや包含関係がなく隣接するしかないという解釈を前提としている。その上で「変化」の問題を考える。現実的存在は、主体が根底にあってそれが何らかの性質を有するものではない。それゆえ一つの主体が性質を変えて変化するというのではなく、隣接した複数の現実的存在の継起という形で変化する。従って変化は連続的にはならないが、この点はサブアトミックなレベルでは、物理学における量子性を考えれば問題は無い。しかし日常的なレベルでは隣接した生起間の変化をできるだけスムーズにするために、現実的存在の継起はできるだけ小さくなければならない。従って標準的な解釈では現実的存在は量子性を有するサブアトミックなスケールにおいてのみ考えられる³⁰⁾。

しかし、この考え方の前提となっている、現実的存在同士の関係は境界を接した隣接的なものしかない、という解釈は先に述べたように誤りである。包含関係や重なり合いを認めれば、現実的存在の継起によるものだけでなく、時空的に重なり合わない差分によって変化を考えることができる。従って現実的存在の縮小に関して、サブアトミックなスケールまで縮小できる一方、サブアトミックなスケールへ縮小したもの以外の現実的存在も存在する。

ともあれ、ホワイトヘッドのコスモロジーには「アコーディオン効果」において拡大にも縮

小にも限界は無い³¹⁾。もっとも現実的存在とは具体的な存在というよりむしろ具体的な存在に適用されるべきカテゴリーであるから、小さなスケールの生起にも巨大なスケールの生起にも、現実的存在が適用されうる、という言いの方がより正しい。実際ホワイトヘッド自身、サブアトミックな生起から星雲に至る膨大な現実的存在の実例を挙げている³²⁾。それゆえウォラックは、現実的存在を「何であれ具体的な存在であるもの」(any concrete existent whatsoever)と規定する。

しかしながら標準的なホワイトヘッドのコスモロジーの解釈では、先に述べたようにマイクロな、サブアトミックな生起のみが現実的存在であるとされる。無論ウォラックの解釈においてもまたそのような微小な生起もまた現実的存在であることは認められているが、彼女の解釈ではそれに加えて、マクロな、日常的な生起(雨が降る、机がある、手を上げる等々)もまた現実的存在とされている。これに対してフェルトは標準的な解釈の立場から、こういった日常的な生起は目的因から生じていないので、主体的志向という目的因によって生じる現実的存在と見なすことは誤りである、とウォラックを批判した³³⁾。

このようなフェルトのウォラック批判については次のように再批判できる。即ちホワイトヘッドのコスモロジーにおいては、現実的存在Sは、「S」という主体的志向を有している。例えば雨が降る、という出来事は「雨が降る」という主体的志向を有する。この現実的存在の生成の過程は、雨が降ることの実現を志向しているのである。そして通常目的因が無いとされている日常的、無機的な生起についての、このような主体的志向が先に論じた物的目的である。それは、ある生起がその生起になることを目指す、という最小限の意味しかない目的因なのである。しかしこういった現実的存在は未来の現実的存在に影響を及ぼす。例えば、雨が降る、という生起は、歩道が濡れる、という生起を引き起こす。

そしてホワイトヘッドは言う。「知的感受の始まる所で、意識が事実上主体的形式に入ってくる」(PR 277)。さらに「物的目的と知的感受によって導入された意識的目的との間に、知的感受と結び付くことによる主体的形式における意識を獲得しない、命題的感受がある」(PR 280)。ここでの命題的感受は、主体的志向の規定の時に言われた、命題を感受する主体、という時の「命題を感受する」というのとは違う。むしろ主体的志向の発生的区分における生成の最終相が命題的感受になっている、ということである。即ち現実的存在におけるそういった最終相には、物的目的、命題的感受、知的感受の三種類の類型があることになる。通常言われる「意図」とはそういった知的感受が最終相となる主体的志向の一種に他ならない。そしてそれと並んで、命題的感受が最終相となる動物の本能的、無意識的行動があり、さらに物的目的による無機的な出来事がある。あらゆる現実的存在はこれら三類型のどれかとなる。その限りであらゆる生起は、マイクロなものもマクロなものも、知的に行為するものも本能的に行動するものも、意識を有するものも無いものも、生物も無生物も、サブアトミックな生起から星雲に至る

まで、全てがそれらの経験の活動、「行為」として「生きている」。即ち世界には何らかの「意図」による「行為」が遍在して、そういった諸「行為」によって世界が構成されている。

ここで標準的な解釈におけるように、サブアトム的な生起のみが「行為」であり、「生きている」ものであったとしよう。するとわれわれが日常的に出会う自然物（鳥、木、草、石、等々）は、それ自体として「生きている」のではない。ただ微小な「生きている」生起の集まりとしてあるだけになる。そして「共に生きている」のは人間の脳髓の微小な電氣的生起と、微小なサブアトム的な生起同士でしかないことになる。するとわれわれの日常生活における自然物との関係（人間と鳥、人間と石、人間と山等々）においては、「生きている」もの同士の直接的な関係による共感や同情、「畏れ」といったものは存在しないことになる。

さらにここで全てが「生きている」ということは微小なレベルの事ではないがゆえに、日常生活においては感知できない、実質何の効力もないものになる。その場合それは、「生きている」ことを前提としない通常の原子や電子の集まりとして自然を考える科学的な世界観、自然観と実質何の変わりもないことになってしまう。無論その場合でも、通常の生物同士の関係は通常の意味での生きている³⁴⁾もの同士の関係となろうが、その場合汎主体主義としてのホワイトヘッドのコスモロジーの意義は全くなくなる。

しかしこのような解釈は誤りである。むしろウォラックが主張するように、サブアトム的な生起から日常的な生起、さらにローマ帝国、星雲に至る全ては「生きている」。それだからこそ、宇宙において人間は特権的な地位にあるのではない。即ち人間は、自然物を技術的に利用するだけのものとして扱ってはならない。自然を「畏れ」自然物と共に生きるべきなのである。そうすることによって、環境問題の根本的な解決も可能になろう。ここにホワイトヘッドのコスモロジーにおける汎心論、あるいは汎主体主義の現代的意義がある。

本文および注におけるホワイトヘッドのテキストは以下の通り

PR : *Process and Reality corrected edition*, Free Press 1978

註

- 1) ホワイトヘッドの用語法では、出来事 (event) は「一つの延長的連続体にある限定的な形で内的に関連付けられた諸々の現実的存在の結合体 [= 集まり]」(PR 73) である。しかし現実的存在が「物」(thing) ではなく、「こと」の生成であるということを日本語で表わす時は、「出来事」という語が一番わかりやすい。ただしホワイトヘッドの用語法との誤解を避けるため、ホワイトヘッドに関しては以下日常的な意味での「出来事」と同義で「生起」という言葉を使用する。

- 2) 「生命 (life)」「生きている (live)」ということに関して、ホワイトヘッドの主著である『過程と実在』においては、現実的存在の集まりである社会のレベルで議論されている (PR 102ff)。しかしこれはコスモロジーを既存の自然科学に応用した限りでの、自然科学における生命概念の追求ということであろう。他方『思考の諸様態』においては、生命は全ての現実的存在が有する活動である「抱握 (prehension)」のレベルで議論されている (Whitehead [1938],ch.VIII)。即ちそういった抱握という活動があることを「生きている」と称している。このことは、全ての現実的存在を「経験」と見なすという次に述べることと併せて、生命があらゆる生起に遍在していることをホワイトヘッドが想定しているということを示す。
- 3) Ford [2006],p.144.またホワイトヘッドの汎主体主義については平田 [2014]も参照。
- 4) 何かを抱握するという肯定的抱握 (positive prehension) である感受の他に、何も抱握しないという「否定的抱握 (negative prehension)」も存在する。さきに述べた (注2) ようにこの抱握の働きに関してホワイトヘッドは「生きている」と称するのであり、それゆえ全ての現実的存在は「生きている」ことになる。
- 5) Stout [2005],p.95.
- 6) 「自己超越体」とは、現在から未来へと超え出ていこうとする働きの事である。
- 7) Christian [1959],p.215.
- 8) Nobo [1986],p.286ff.
- 9) PR 244. なおこの問題についての詳しい議論は平田 [2010]pp.126-128、を参照のこと。
- 10) Davidson [1978].
- 11) O'Brien [2015],p.22.
- 12) PR 32.
- 13) HIRATA [2008].
- 14) Anscombe [1957],pp.45-46.ただしアンスコムスの例は「人は腕を上下に動かす」「ポンプを押す」等々である。
- 15) Davidson [1963],p.4, Davidson [1967],p.109. 無論その例は別のものである。
- 16) Goldman [1970].
- 17) 正確には、ゴールドマンは「行為トークン (act-token)」という語を使っている。それはある行為タイプの行為主体による実現である。
- 18) Ibid.p.22ff.
- 19) ただしゴールドマンによれば因果的生成は因果性とは異なる。これについては次に論じる。
- 20) Ibid.p.26.
- 21) Ibid.p.23.
- 22) これは、クリスチャンによって主張された解釈であり (Christian [1959],pp.99-103)、ホワイトヘッドのコスモロジーの標準的な解釈はこれに従っている。
- 23) PR pt.IV, ch. II.

- 24) この問題についてのより詳しい議論は平田 [2012]を参照。
- 25) Goldman [1970],p.46.
- 26) この概念はファインバーグ (Feinberg [1965]) による。
- 27) 物的目的の第一種と第二種に関しては、PR 266-267を参照。
- 28) 実際ホワイトヘッド自身 PR 229において「ローマ帝国」という現実的存在について論じる。
- 29) 基礎行為はダントー (Danto [1963]) によって最初に論じられた。
- 30) こういった標準的な解釈を明示的に論じている一例として例えば、カブによる解説書 (Cobb,Jr. [2008]) がある。しかしむしろ、後で述べるウォラック (Wallack, F. B, [1980]) 以外のほとんど全て (中村 [2007] のようなごくわずかの例外を除いて) のホワイトヘッドについての研究書、論文はこの立場に立って書かれているといつてよい。
- 31) もっともホワイトヘッドは現実的存在の原子性を強調する。それゆえ標準的な解釈においては、それ以上は不可分な単位 (=アトムス、原子) としての極微なスケールの現実的存在を問題とする。そして物理学における量子による不連続性と相まって、標準的な解釈では、現実的存在とはこの極微なスケールのサブアトミックな生起のみであるとするに至った。しかしここでの原子性=不可分性は時空間的な延長性に関する不可分性ではない。「行為」を分割したらもはやその「行為」ではなくなる(「ジョンがジェームズを殺す」という行為を弾が銃口を出た時点で分割すれば、「ジョンがジェームズを殺す」という行為はなくなり、「ジョンは銃を撃つ」という行為と「弾がジェームズに当たる」という出来事しかなくなる) という意味での不可分割性に過ぎない (PR 69)。この問題については平田 [2012]で詳しく論じた。
- 32) Wallack [1980],ch.1.
- 33) Felt [1980],特にp.61においてこのような批判をする。
- 34) 無論ホワイトヘッドは注2で述べたようにそういった意味での「生命」についても論じてはいる (PR 102ff)。

引用文献

- Anscombe, G. E. M. [1957], *Intention*, Basil Blackwell.
- Black, M. (eds.) [1965], *Philosophy in America*, Cornell U. Pr..
- Christian W. A. [1959], *An Interpretation of Whitehead's Metaphysics*, Greenwood Pr..
- Cobb, Jr, J.B. [2008], *Whitehead Word Book*, P&F Pr..
- Danto, A.C.[1965], "What we can do," *Journal of Philosophy* 60,435-445.
- Davidson, D. [1963], "Actions, Reasons, and Causes," in Davidson [1980],3-19.
- [1967], "The Logical Form of Action Sentences," in Davidson [1980],105-121.
- [1978], "Intending" in Davidson [1980],83-102.

- [1980], *Essays on Action and Events*, Oxford U. Pr..
- Feinberg, J. [1965], “Action and Responsibility, in Black[1965], 134-160.
- Felt, J.W. [1980], “Book Review” *Process Studies* vol.10, 57-65.
- Ford, L.S. [2006], “Whitehead’s Creative Transformation: A Summation” *Process Studies* vol.35, 134-161.
- Goldman, A. I.[1970], *A Theory of Human Action*, Princeton Un. Pr..
- Hirata, I. [2008], “Experience God, in MURATA[2008], 126-143.
- 平田一郎 [2010], 「ホワイトヘッドにおける目的因」『プロセス思想』第14号, 125-134.
- [2012], 「連続性と原子性」『プロセス思想』第15号, 87-98.
- [2014], 「汎主体主義の可能性」『理想』No.693, 理想社, 31-42.
- Murata, Y. (eds.) [2008] *Whitehead and Existentialism*, Koyo Shobo.
- 中村昇 [2007], 『ホワイトヘッドの哲学（講談社選書メチエ）』、講談社、2007年.
- Nobo, J. L. [1986], *Whitehead’s Metaphysics of Extension and Solidarity*, State U. of New York Pr..
- O’Brien, L. [2015] *Philosophy of Action*, Palgrave Macmillan.
- Stout, R. [2005], *Action*, Acumen Publishing Limited.
- Wallack, F. B. [1980], *The Epochal Nature of Process in Whitehead’s Metaphysics*, State U.of New York Pr..
- Whitehead, A. N. [1938], *Modes of Thought*, Free Pr.,1968.

(ひらた・いちろう 短期大学部准教授)